

夏山のご馳走

7月8日(土)、大磯・高麗山から湘南平を歩いてきた。九州が大雨で甚大な被害が出ているというのに、こっちはカンカン照りである。参加者3人とぼくの総勢4人が勢揃いしたところで、高来神社にむかって歩きはじめる。道路はさえぎるものもなく、日射をダイレクトに浴びる。風もない。「暑い、暑い」と交互に口にしながらのんびり歩を進める。

7月8日は梅雨の真っ只中である。雨に降られるか、降られなければカンカン照りだろうことは100%予想できた。あえて計画した理由は、下山したら平塚の稲原宅に立ち寄り、稲原カレーをご馳走になる計画があったからである。

ようやく高来神社に到着、神社の森の中に入る。涼やかな風が吹き抜ける。登山の無事をお祈りし、神社の裏手にまわる。道標が立ち、右女坂、左男坂を指していた。躊躇なく女坂を登りはじめる。女坂は関東ふれあいの道にも指定されていて、よく整備されている。

登山者が次々にぼくらを追い抜いていく。カンカン照りにも関わらず登山者が多いのは土曜日だからかな、なんて思っていたらどなたかの一言、「平塚の七夕祭りに便乗ハイキングじゃないかしら」に一同納得。

「女坂なのに、急ね」など文句を言いつつひと登りすると、ちょっと傾斜がおちる。爽やかな風が吹き抜ける。「あー、気持ちいい。山なればこそね」「ほんと、夏山のご馳走は風と水」、一陣の風の爽やかさを味わってしまったら、だれもが山をやめられなくなる。息切らせて登っているとき、頬をなでる一陣の風は最高のご馳走だ。「いっぽん」とリーダーから声がかかって、コース脇にザックを降ろして飲む水ののどごしの爽やかさ。「いっぽん＝一本」とは、登山用語で休憩のこと。

しかし、風も水も諸刃の刃であることを忘れてはならない。体を吹き飛ばしそうな強風は恐ろしい。いつだったか八甲田大岳の山頂付近で、凄まじい強風に吹かれた。前進すべく片足を上げると、残る片足では体を支えられない不安から片足を上げることができない。ぼくは非常用のロープを出し、先頭はぼく、最後尾はサブリーダーが体に巻き付けて、その間のロープを皆さんに電車ごっこよろしく片手で握ってもらった。それで安心できたのか皆さん片足を上げ、前に踏み出した。それで山頂部を通過したことがある。

7月下旬、北鎌尾根 ㊦ 天上沢側取り付きで豪雨の中ツエルトを張り、中で横になって一晚過ごしたことがある。次第に天上沢の水量が増し、ゴロゴロと石が流れる音が聞こえるようになった。やがてドカーンという音とともに天上沢の流れがツエルトの裾を洗うようになった。もう横になってはられない。ぼくらは一段上の岩陰に座り、ツエルトをかむって朝まで過ごした。いやあ、怖かった。

ご馳走も食べ過ぎれば腹をこわす。